

Ślokavārttika における外界の問題

寺 石 悦 章

1 Ślokavārttika (ŚV) の Nirālambanavāda (N) 章と Śūnyavāda (Ś) 章の内容は、従来の研究でもたびたび言及されてきた。しかしその多くは、ディグナーガ・ダルマキールティ・シャーントラクシタ等と関連する部分のみを取り上げたものであり、両章の全体像はいまだ十分に明らかにされているとは言えない¹⁾。

この両章は、二つの章全体でひとつのまとまりをなしている点で、ŚV の中でも特異な章といえることができる。また、ŚV が Śabarabhāṣya (ŚBh) への注釈であるという制約もあって、クマーリラはやや複雑な構成をとりながら自説を展開している。そのため、個々の議論を取り上げた場合、それが全体の中で果たす役割が理解し難い部分も多い。

本稿では主にクマーリラの説明を手がかりに、両章の全体像とその中で中心となる議論が何であるかを提示し、今後の研究の一助としたい。

2 まず両章の構成の大枠について見ていくことにする。クマーリラの説明は次の通りである (N章 vv. 14-19ab)。

両章において考察の対象となっているのは、仏教徒²⁾の唱える外界非実在論と知識非実在論である。このうち後者は前者に基づくため、前者が考察の対象となる。その前者 (外界非実在論) はさらに認識手段による外界非実在論と認識対象による外界非実在論に分けられる。このうち後者は前者に基づくため、前者が考察の対象となる。その前者 (認識手段による外界非実在論) は、さらに推理による外界非実在論と直接知覚による外界非実在論に分けられる。

このようなクマーリラの説明は、直接には対応する ŚBh の議論について言及したものである。しかしクマーリラによれば、両章の議論は ŚBh の議論にもとづいているため、この説明の内容は実際の両章の構成とよく一致する。ここに言及されている部分を本論、その前・後の部分をそれぞれ序・結として、両章の構成の大枠を偈の番号³⁾と共に示すと以下ようになる。偈の数から明らかなように、推理による外界非実在論についてはN章の、また直接知覚による外界非実在

論についてはŚ章の大部分があてられている。

序	N章 vv. 1 -13
本論の区分	N章 vv. 14 -16
外界非実在論の区分	N章 vv. 17 -18ab
認識手段による外界非実在論の区分	N章 vv. 18cd-19ab
推理による外界非実在論について	N章 vv. 19cd-201
直接知覚による外界非実在論について	Ś章 vv. 1 -259ab
小結	Ś章 vv. 259cd-261ab
認識対象による外界非実在論について	Ś章 vv. 261cd-263
知識非実在論について	Ś章 v. 264ab
結	Ś章 v. 264cd

推理による外界非実在論とは、論証式⁴⁾によって外界の非実在を論証するものである。クマーリラによれば、これは直接知覚にもとづく経験に反するという理由で批判される⁵⁾。その批判は、直接知覚が外界に作用することを前提としているが、仏教徒はその前提自体を認めず、直接知覚は外界に作用していないと主張する。それが直接知覚による外界非実在論である。

クマーリラが述べる、推理による外界非実在論と直接知覚による外界非実在論のこのような関係は、外界の実在・非実在を論証するために問題となるのが、直接知覚による外界非実在論のみであることを示している。クマーリラが外界の実在を論証する場合には、直接知覚による外界非実在論を論破すればよく、そのみによって外界の実在は論証され得る。一方、仏教徒が外界の非実在を論証する場合には、推理による外界非実在論を成立させるために前提となる直接知覚が外界に作用していないこと、すなわち直接知覚による外界非実在論を成立させる必要がある。しかし、直接知覚による外界非実在論が成立するならば、そのみによって外界の非実在は論証され得る。また、クマーリラが六つの認識手段のうち直接知覚を最も重視している点からも、同様のことが言える。

クマーリラの説明に従った場合、直接知覚による外界非実在論の成立・不成立によって、推理による外界非実在論の成立・不成立が決定されることになる。このことは、両者を合わせた認識手段による外界非実在論とそれに基づく認識対象による外界非実在論、さらにその両者を合わせた外界非実在論とそれに基づく知識非実在論の成立・不成立が、いずれも直接知覚による外界非実在論の成立・不成立によって決定されることを意味している。

3 次に、クマーリフによって両章の中心とされる、直接知覚による外界非実在論の議論について見ていくことにする。ŚBh のうちこの議論に対応する箇所は、内容から (A)～(H) の 8 つの部分に分けることができる。その箇所⁶⁾を、対応する Ś 章の偈の番号と共に示すと次のようになる。

- (A) p. 28, 14-16 vv. 5- 63⁷⁾ (E) p. 30, 3- 5 vv. 234-241
(B) p. 28, 17-20 vv. 64-229 (F) p. 30, 5- 9 vv. 242-244
(C) p. 28, 20-p. 30, 1 vv. 230-231 (G) p. 30, 10-13 vv. 245-247
(D) p. 30, 1- 3 vv. 232-233 (H) p. 30, 14-17 vv. 248-259^{ab}

このように、議論の全体は ŚBh の注釈の形をとっており、実際に(c)以下では ŚBh の語句の解説が中心になっている。しかし、大部分の偈があてられている (A)(B)では、ŚBh にはない多くの議論がクマーリラによって付加されている上に、引用されている ŚBh の語句が批判されている場合もある。そして ŚBh の注釈という形にあまり制約されずにクマーリラの見解が示されており、この部分が直接知覚による外界非実在論についての議論の中心とみなされる。このうち(A)では仏教徒による外界非実在論が、(B)ではそれに対するクマーリラの批判が主に述べられている。さらにこの部分を内容ごとに整理して示すと次のようになる。

- | | | |
|-------|------------------------|-------------|
| (A) 1 | 仏教徒の見解Ⅰ（第一～第四） | vv. 5- 34 |
| | （敵者との対論） ⁸⁾ | vv. 35- 56 |
| 2 | 仏教徒の見解Ⅱ（第五） | vv. 57- 63 |
| (B) 1 | 仏教徒の見解Ⅰ（第一～第四）に対する批判 | vv. 64-200 |
| 2 | 仏教徒の見解Ⅱ（第五）に対する批判 | vv. 201-229 |

— 999 —

四つに分けることができる。以下にそれを示す。

第一の見解 vv. 5 -17 それに対する批判 vv. 64 -177ab

第二の見解 vv. 18 -20a それに対する批判 vv. 177cd-179ab

第三の見解 v. 20b-d それに対する批判 vv. 179cd-199

第四の見解 vv. 21-34 それに対する批判 v. 200

(第五の見解 vv. 57-63 それに対する批判 vv. 201-229)

続いて、五つの見解とそれに対する批判の概要を示す。

＜第一の見解とそれに対する批判＞

仏教徒によれば、認識されているのは形象であるから「形象をもつもの＝所取」であり (v. 5)、また認識されているものが実在であるから「実在＝所取」である (v. 7)。よって形象をもつもの (ākāravat)＝実在 (vastu)＝所取 (grāhya) と考えられる (v. 10)。所取のみが実在と考えられるから、ミー・マーン・サー学派が考えるような、所取と切り離された能取は実在ではないことになる (v. 12)。よって、能取は所取と別であってはならず、能取＝所取＝知識と考えられる (v. 14)。

これに対しクマーリラは、同一の知識が所取かつ能取である場合 (vv. 64-149 ab) と、前後する知識がそれぞれ所取と能取である場合 (vv. 149cd-177) とに分け、前者については同一のものが所取かつ能取であるような例が見出せないこと等、後者については知識が利那滅であること等を根拠に、いずれも不合理であることを論じる。

＜第二の見解とそれに対する批判＞

仏教徒は、自らの見解とミー・マーン・サー学派の見解のいずれが優れているかという視点から論じる。ここでは、知識のみを想定する方が、知識と外界の事物の両者を想定するよりも想定が簡潔であること⁹⁾、また知識は両派にとって認められていることを根拠に、仏教徒の見解が優れているとする。

これは、両派の見解が成立していることを前提にしている。クマーリラは、第一の見解が論破されたことを根拠に、この見解は成立しないと見ている。

＜第三の見解とそれに対する批判＞

ここで仏教徒は、接近していることと関係していることを所取であるための条件と見ている。そして所取が外界の事物である場合に所取と能取は遠く離れているが、所取が知識である場合には、所取は能取に接近し、関係するとする¹⁰⁾。

クマーリラはこれに対して、第一・第四の見解が論破されたことを根拠に、こ

の見解は成立しないと見ている。

＜第四の見解とそれに対する批判＞

仏教徒は、事物があっても知識がなければ認識があり得ないこと (v. 23)、事物がなくても想起等によって認識があり得ること (vv. 28-29) 等を根拠に、知識が生じて知識が自己認識されることを主張する (v. 27)。

これに対してクマーリラは、知識は自身には向かわないとし (v. 184)、知識の認識は事物を認識した後で要請 (arthāpatti) によって知られるとする。

＜第五の見解とそれに対する批判¹⁾＞

仏教徒は、見る者によって同一のものが異なって認識されること (v. 59)、同一のものが別の名称で呼ばれること (v. 58) などを指摘し、このようなことは所取が事物である場合、すなわち形象が事物に属する場合にはあり得ないとする。

これに対してクマーリラは、同一の事物に異なった多くの形象があることを不合理とは見なさず、むしろ多くの形象が認識されるのだから、その通りに多くの形象が存在するのだとする (vv. 219-220)。

4 このように、第二・第三の見解は第一・第四の見解に依存するものとして扱われており、その内容も極めて簡潔に述べられているに過ぎない。このことは、クマーリラの批判の仕方にも明瞭に現れている。よって Ś 章の議論の中心となるのは、第一・第四・第五の見解 (およびその批判) ということになる²⁾。

すでに見たように、これら三つの見解 (およびその批判) は、いずれも ŚBh(A) と(B)の注釈という形式をとっている。しかし、実質的に ŚBh の議論を敷衍しているのは第一と第四の見解である。第一の見解は(A)(B)に、第四の見解は(C)～(F)の中に類似した議論を見いだすことができる。これに対し、第五の見解は ŚBh の対応する箇所と同様の議論を見いだすことはできない。また論じられているのもそれまでと異なる概念や語の表示対象の問題である。内容的にも分量からも、Ś 章の中心となるのは第一・第四の見解 (およびその批判) である。しかしクマーリラ独自の見解がよく表われているのは第五の見解である。

1) 両章の關係に言及したものに、海恵宏樹「ŚLOKAVĀRTTIKA の闡說する仏教說」『インド學試論集』1, pp. 24-40, 1960 (海恵 1960); 若原雄昭「知識の真偽性」『南都仏教』49, pp. 55-77, 1982 (若原 1982) がある。山崎次彦氏は両章の概要を紹介しているが、氏が両章の關係を誤って解釈していることは、海恵 1960, p. 29 (注 8) に指摘されている。

2) クマーリラは、瑜伽行派と中觀派の名を挙げる (N 章 v. 14)。本稿における“仏

教徒の見解”とは、クマーリラが瑜伽行派と中観派のものとして紹介している見解のことである。Ś章において考察の対象となっているのは、ディグナーガの系統の見解と考えられる(三種の注釈では *Pramāṇasamuccaya*, *Pramāṇavārttika*, *Pramāṇaviñśaya* から多数の偈を引いて説明している)。N章において考察の対象となっているのは、瑜伽行派の見解とも中観派の見解とも関連が指摘されており、さらに検討を要する。

- 3) 偈の番号は *Pārthasārathimīśra* 注による。
- 4) その論証式は次のようなものである(N章 v. 23)。「[主張] 柱等の認識は虚偽である。[理由] 認識であるから。[実例] 認識は虚妄であることが経験される。夢等における認識のように。」
- 5) Ś章 vv. 1-2 参照。
- 6) Frauwallner, E., *Materien zur Ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā*, Wien, 1968 .
- 7) vv. 1-4 には、推理による外界非実在論との関係や両派の基本的立場などが整理して示されている。
- 8) 敵者の見解には、事物に属する形象が知識にのっている (*ārūḍha*) ために、形象が知識に属すると誤解されるとする見解 (vv. 35-36ab), 事物に属する形象が知識に映っている (*pratibimba*) ために、形象が知識に属すると誤解されるとする見解 (vv. 36cd-39) 等がある。いずれも、形象が知識に属することを前提としている仏教徒の見解 I を踏まえてなされている反論であり、仏教徒の見解 I に付随した議論と見なすことができる。この議論は(A)において完結しており、(B)ではそれに言及していない。
- 9) 「想定が簡潔であること」は vv. 18-20a では述べられていないが、三種の注釈のいずれにも現れ、またそれに対する批判 (v. 177) の中でも述べられている。
- 10) 同様の考えは、*Pramāṇavārttika*, *Pratyakṣa* 章 vv. 324-325 (Miyasaka, Y. ed.) に見ることができる。しかし双方の記述があまりに簡潔であるため、相互の影響関係等を示す記述を見いだすことはできない。
- 11) 第五の見解の内容については、若原1982参照。
- 12) *Tattvasaṃgraha* の *Bahirartha* 章では、Ś章から13偈半を引用している。うち10偈は、第一・第四・第五の見解に対する批判の中心となる部分、もしくはまとめの部分の引用である。vv. 2064-2068 (172cd-177ab) は第一の見解, vv. 2013-2016ab (184-187ab) は第四の見解, vv. 1986cd-1987 (219-220ab) は第五の見解 (GOS 版)。

〈キーワード〉 Ślokavārttika, Nirāmbanavāda, Śūnyavāda, 外界実在論

(筑波大学大学院)